

渋沢栄一が秋田県民に伝えたこと

武 田 大

(郷土歴史研究会 代表)

渋沢栄一は過去2回秋田県を訪れている。

1回目は明治15(1882)年5月、2回目は大正6(1917)年10月15日～17日の2泊3日の日程であった。渋沢はこの2回目の来県の際に各会場で講演をして、直接秋田県民に自らの考えや思いを伝えている。

【2回目に来県した際の日程詳細】

10月15日 午後7時50分秋田駅到着

16日 午前中日本石油工場視察、午餐を兼ねて土崎町招待会、午後、県会議事堂で講演会、夜、官民合同の歓迎会を(秋田)倶楽部で開催

17日 秋田銀行本館(秋田市大町三丁目にある現在の秋田市立赤れんが郷土館)で行員向けの訓話、訓話終了後、青森・弘前に向けて秋田駅から列車で出発

最初の来県時は第一国立銀行頭取として同行秋田支店の営業状況の視察であったが、2回目は銀行頭取を辞してからの来県であった。渋沢はこの時、秋田県を訪れる前年(1916年)の7月に第一銀行頭取などの要職から解放され、東北振興会の一会員として東北地域の発展のために、講演会など各地で啓蒙活動をしていた。

この東北振興会は大正2(1913)年、渋沢ら中央政財界有志によって組織され、東北地方の現状を視察しながら、同地方の振興に繋げる役割を担っていた。その活動の一環として山形県から秋田県、青森県を訪れている。

このなかで渋沢は秋田市内2か所、具体的には土崎町招待会で「武田亭」と、「県会議事堂」とで講演を行っている。講演会場の一つである武田亭は、現在の秋田市土崎港南二丁目周辺にあった料亭で、当時の写真から講演会場の広さが認識できる。

この会場では東北の振興の根本として、地域の人々の奮起努力、現状に満足せず憤然決起・不撓不屈の精神を持ってあらゆる方面に活動するべきと訴え、「棚から牡丹餅が落ちるのを待ってもそれは無駄である」と諭したのであった。



(武田亭)



(武田亭のあった周辺)

もう一つの会場、秋田県会議事堂は秋田市中通一丁目周辺にあった。この会場では県内の新規事業が悉く他府県人によって経営されている現状から、一面に於いて秋田県人が他府県人との対抗では既に一步遅れているのではないかと持論を展開している。

その上で、それぞれの講演の中で鉱山や油田、稲作・養蚕に恵まれた秋田は「稀なる天恵豊かな地」であると強調するとともに、その天恵を活用するためには「(県民の)協同一致の観念」と、今一層の「(発展に向けた)勇気と忍耐」を持って事業を継続し、新たな事業をも開発してほしいと秋田県人に対する希望を述べている。

また、秋田銀行本店にも立ち寄って行員一同に訓話をした旨が渋沢栄一伝記資料に記録されている。渋沢が秋田銀行を訪れた目的は、明治45(1912)年7月7日の本店落成式に招待されていたが欠席していたので急遽旅程に組み込まれたものと推測する。当時の銀行役職員にしてみれば格別の思いで訓示を拝聴したに違いない。渋沢は行員に対する訓示を済ませ、列車で次の訪問先弘前市に向けて秋田駅を出発した。実は、弘前市の銀行や商工会などの関係者から来訪を強く要請されていたようだが、日程の都合上、弘前駅のホーム上で弘前市民に謝意を伝えた旨も伝記に記録されている。

ちなみに、青森第五十九国立銀行(現在の青森銀行)の設立にも渋沢が関わっている。その背景から訪問を要請されたのだと考えられている。青森県では銀行設立に加え東北振興会の活動を通じて、農・畜産の発展に寄与した足跡があり、渋沢の考えとして東北全体での産業育成を展望していたようである。



(当時の秋田県会議事堂)



(秋田県会議事堂のあった周辺)

渋沢はもともと埼玉県深谷市の農村出身であり、東北地方の金融の拠点設置と産業振興の観点から将来の食糧問題の解決に向けた道筋を想定していた。渋沢にしてみれば当時、東北地方の発展無しに日本経済の発展は考えられなかったであろう。

しかし、渋沢の意に反して彼を迎えた東北地方の人々の反応は鈍く、渋沢が何かやってくれるのだろうと他力本願の期待をするだけであった。来県した当時、渋沢は既に77歳、彼に出来ることは秋田県を含む東北人自身の奮起努力に微力ながら力を添えることを繰り返し述べ、詰まるところ地域主義の喚起を促したのであった。

東北振興会は昭和2(1927)年に一旦解散したが、同年、東北の有志の人々により新たな「東北振興会」が設立されている。渋沢栄一伝記資料にはこの振興会設立の経緯と、渋沢が振興会

から要請されて名誉顧問に就任したことなどが紹介されている。

近頃、電子マネーなどの普及により、今回の渋沢の肖像が描かれた新一万円札を手にする機会は福沢諭吉のそれよりは多くないかもしれない。しかし、偽造防止の新技术採用は勿論であるが、明治から昭和にかけて我が国の近代化をリードし日本の資本主義の父などと呼ばれ、明治の近代化に少なからず貢献した史実を再認識する機会になることを期待したい。

また、新紙幣に切り替わるこのタイミングで、1990年代初頭のバブル経済崩壊から日本経済が今日まで低迷が続くいわゆる「失われた〇〇年」打破となるよう願わずにはいられない。

おわりに

私が渋沢栄一と秋田銀行との関係を知ったのは、昭和54(1979)年に刊行された「秋田銀行百年史」でした。この百年史の中で渋沢栄一と県

内銀行の関係について紹介した頁があり、互いの浅からぬ関係を知る機会となりました。その後、渋沢について更に深掘りすることになり、行員時代「秋田銀行130年史」(2009年)、「秋田銀行140年史」(2019年)の編纂に関わる機会となりました。

「秋田銀行140年史」が発刊される直前、渋沢栄一の肖像が描かれた一万円札発行のニュースがあり、俄然渋沢への注目度が上がったと記憶しています。以降、秋田経済研究所の「あきた経済」への寄稿、講演会の開催の要請等関心の高まりを肌で感じています。

旧秋田銀行本館の建物内にある「貴賓室」や「会議室」にも渋沢が足を運んだことを思えば実に興味深いものがあります。本読者の方々にもこの機会に是非訪れて頂きたいと思います。

※渋沢の2回の来県目的や、面談した人物、遺跡等については、秋田経済研究所刊「あきた経済」2022年7月号および8月号の寄稿「渋沢栄一が訪れた秋田県」を御覧ください。

